

渡戸稲造、頭山満などがあげられます。

十・国会議員、著作家

実業家として成功した星は、代議士選挙の立候補をすすめられました。衆議院議員四期、参議院議員一期の計十二年間国会議員をつとめました。戦後第一回の参議院選挙全国区では第一位で当選しました。

星一は著作家でもありました。多忙の身でこれほど多数の著作を残したことは驚異的なことと思います。

官吏学、選挙大学、親切第一、お母さんの創った日本—日本略史、支那の歴史、哲学・日本哲学、その他多数。

十一・魅力溢れる人生哲学

社会教育者、ある種の思想家でもありました。星の最大の思想・哲学は「親切第一」です。星の云う「親切」は、自己に対して、何人に対して、職務に対して、物品に対して、時間に対して、学問に対して、金銭に対してなどすべてに向けてられています

十二・逝去

星は、大正六、七年、南米ペルーに奈良県の面積に匹敵する土地を購入していました。ペルーの地に日本人移民を沢山送り、夢の楽園を築き上げる雄図実現の途中、昭和二十六年一月十九日米国ロスアンゼルスで客死しました。

十三・総括

星一には、独特な発想力、氣宇宏大、破天荒、突進力（先頭に立って原野を切り開いていった）、信念の人、朴訥な人、

人脈の大きさ、人を思う心、惜しむらくは支える布陣に難があった、明治・大正期の巨星の一人、といった言葉が思い浮かびます。

(平成十七年十二月例会)

齋藤茂吉における病いと老いと

岡田 靖雄

一八八二年(明治一五年)五月一日に守谷家にうまれた齋藤茂吉は、一九〇九年六月三〇日(二七歳)に卒業試験をまえに腸チフスを発し、一旦よくなったが一月に再発し、回復がおくれて、登校できるようになったのは翌年五月。そのため卒業は一年遅れの一九一〇年末になった。

東京府巢鴨病院には五年半つとめた。その間に養父齋藤紀一の娘でる子と結婚した。やめた年一九一七年の末に長崎医学専門学校教授に任ぜられたかれは、しばしば遊郭に登棲し(前半は単身)、そのため淋病性副睾丸炎による激痛にくるしんだ。一九二〇年一月六日インフルエンザにかかり、肺炎を併発し謠妄状態ひしこせになった。

○はやりかぜひしこせ一年おそれ過ぎ来しが吾は臥われりて現うつつともなし回復したが六月二日に咯血し、入院につきぎ転地療養、血痰ときどき。旅先で同宿した耳鼻咽喉科の久保猪之吉の診察をうけて「気管支のただれだろう」といわれて「万歳！」と

しるしている。咯血につづき血痰があるのに樂觀しているのは、医師としてあまいのか、結核をみとめたくない希望的観測だったか。しかし八月二十六日にいたって、咯血と自覚し、「しづかに生きよ、茂吉われよ」としるしている。血痰は一月におわった。

一九二二年(大正一〇年)はじめ(三八歳)に自費留学がきまり、同級だった神保孝太郎に受診し蛋白尿を指摘されたが、恩師入澤達吉から「まあ行つて見給へ」といわれた。一九二二年はじめヴェーンにつき、翌年なかばにミュンヘンにうつって脳病理解剖学の研究をつづけた。

○風気味かぜきみのことは屢しばしばありしかど熱ねつに臥ふししこと一日ひとひもあらず
この歌は四一歳のときのものだが、「小生も勢ねつ(精)力若い者に負けざれども」と友人の中村憲吉にかいた。陰毛に白毛のまじっていることをみつけたのはこの頃である。また血痰が再発した。

○朝夕に少しづつ血痰けつたんいでしかどしばらく秘ひめておかむとおもふ

パリで妻と再会したかれは帰国途上で、一九二四年一二月二九日に紀一の青山脳病院が全焼したことをしる。翌年一月七日帰京したかれは、病院再建に苦勞する。当時病院に保険がかけてなくて、また地元(東京)に再建反対の勢いきほいがつよかった。年末(四三歳)にかかれは「本年八十年グラキ老イタ氣ガシタ」としるした。

一九二六年四月五日に、松原に新築された青山脳病院が許

可された。義父には手ぬかりの面がおおく、警視庁からの勸告で翌年四月二十七日にかれは院長業務を継承した。

一九二九年(昭和四年)一月二十七日(四六歳)、尿の蛋白反応がいちじるしかった(それまでしらべていなかったようである)。同級だった佐々廉平に慢性腎炎と診断され、食事療法・錯剥液などを処方されたが、この指示はまもられなかったようである。

○ごぞの年あたりよりわが性欲せいよくは淡あはくなりつつ無くなるらしも

一九三二年四月一日、日本神経学会のあと巢鴨中老会ですつての仲間とのんだ。

○若くして巢鴨病院にあたるもの見れば老ゆるにもはやきおそきあり

自分の老いがいとは感じなかつたのだろう。八月に喘息がひどかつたところがあるが、どういう性質のものだったか。

一九三二年に、
○ものぐるひのあらぶるなかにたちまじりわれの命いのちは長しとおもはず

とうたつた。これについてはのちに、「職業ではあるが、所詮長命といふわけには行かぬであらうといふ感慨述懐である」と自評している。

遊び好きの妻との仲はずっとよくなかつたが、一九三三年(昭和八年)一月八日の新聞に妻たちの醜聞が報道されて「正に昏倒せり」。五一歳のかれは齋藤家をさり院長をやめる

ことをかんがえたが、とめられた。妻とは疎開まで別居した。こういう苦勞のなかで、一九三四年三月二三日「小生の尿の蛋白も増加し：(血圧一八〇―一七〇) 仕方なき故食養生をいたし居り候」。

歌の門人永井ふさ子と恋愛関係にはいつたのは一九三六年一月一八日で、この頃

○ムラムラトキヨキヲトメニヨリテイキリ立つあまつ麻羅
やうつしまらや

とうたつたが、尿に糖もでた(腎性糖尿か)。薬はときどきのんでいた。

一九三七年六月二二日に、ドイツで訪問したことのあるシヨルツ教授の歓迎会にでたが、シヨルツは、「ただ僕が余り老いたので驚いてゐた」、かれ五五歳。六月二四日に帝国芸術院会員をおおせつけられた。それをうけてだろ開成中学校の同窓会があつた。

○横浜の成昌樓につどひたる友等みな吾よりわかし

一九四〇年になると、物忘れなどを自覚するようになった。

○日々幾度悪なる行為をわれ為れどその大かたはものわす
れのため

○いささかの所有物も振りかへりみずこの日ごろわれ癡呆
のごとし

一九四一年になると、ときどきエナルモン(男性ホルモン)を注射している。「トランクノ錠ノトコロヲ開ケコト出来ス。

健忘(老耄)ノタメナリ」。

一九四二年還暦。

○日々幾度にも眼鏡をおきわすれそれを軽蔑することなし
○還暦になりたるわれは午前より眠しむむしと感じ居るのみ

一九四四年二月一五日に「今日ハ腎臓ヲイタハルタメニ食養生ヲナシ、塩分ヲ減ジタルガ、体ノ具合ヨキヤウナリ」と、一日の減塩で効果があつたようにしるす。

戦禍がせまり、一九四五年四月一〇日に故郷の山形県に疎開。敗戦はまたかれの心をうちめした。翌年二月一三日に左湿性胸膜炎にかかり、五月上旬までねていた。

○いきどほる心われより無くなりて呆けむとぞする病の牀に
怒りの激しさはかれの特性であつたのだが。

一九四七年二月六日(六四歳)に左不全麻痺を生じたが、これは数日でおわつた。ハセスロールあるがいづれためすと息十茂太にかいてゐる。往診してもらつて「血圧一一〇―一九五、ヤ、高シ、散薬三包ヲモラフ」(やや、ではないだろが)。眼底出血もあつた。

同年一月四日、世田谷区の茂太宅にもどつた。

一九四八年一月一八日(六六歳)に、「食養生(Satzarn)ヲハジメタ。oedemナシ」と、やればすくきくよゆうな日記。

翌年、

○人に害を及ぼすにあらねども手帳の置き場所幾度にて
も忘る

その翌年に、

○臥処には時をり吾が身臥せれども「食中塩なき」境界な

らす

○おとろへしわれの体を愛しとおもふはやことほりも無くなり果てつ

この夏(六八歳)箱根強羅の別荘に滞在中、心臓喘息の兆

一〇月一八日兄守谷富太郎死去。そして翌日左半身麻痺、意識障害、息苦しき。一月八日佐々往診、血圧三三〇/一二〇、でも散歩できるまでに回復した。

一九五一年二月九日、心臓喘息確実になる。

○われ七十歳に間近くなりてよもやまのことを忘れぬこの現より

一月三日に文化勳章拝受、宮内庁の廊下をやつとあるいた。一月二〇日自宅で、一高、大学の同級生と座談会。佐々は「その著しき衰弱振りに驚いた」。このときの写真では、かれが一〇〇歳上にみえる。

一九五二年四月二日に最後の外出。そして、

○いつしかも日がしづみゆきうつせみのわれもおのづからきはまるらしも

が、歌集『つきかげ』の最後におかれている。

一九五三年にはいつて終日臥床し、二月二五日に心臓喘息で死去、七〇歳。

平福一郎による解剖では、左側のひろい気管支肺炎(これが心臓に負担をかけた)、全身性の高度の動脈硬化。両肺尖に結核のあと、左側胸膜炎のあと。脳底動脈の硬化性変化がいちじるしく、右尾状核、内包、被殻、蒼球部に軟化巣がで

いて蜂窩状。腎臓の動脈・細動脈の変化もいちじるしい。

結局、肺結核はそうひどいものではなかった。慢性腎炎、高血圧、全身(ことに脳)の動脈硬化がいちじるしかった。気管支肺炎が致死因になったが、これがいつからのものか、はつきりしない。また、詳細な腎機能検査、胸部レントゲン撮影がなされた記録がない。

とくに問題となるのは、慢性腎炎についてかれはあまりになげやりだった。ときどき薬をのみ、まれに減塩食をして、一日の減塩で効果があるような考え方をしている。帰国後の心労(病院再建、妻の問題)のいちじるしかったことも、体調悪化を促進した。それにしてもかれの老化ははやかかった。また老化をかなり意識してもいた。精神面の老化についての自己観察は適切だったといえよう。

結論としては、「医者の不養生」の感がつよい。

(平成十八年三月例会)